

フィリアに集う
羊たちの唄

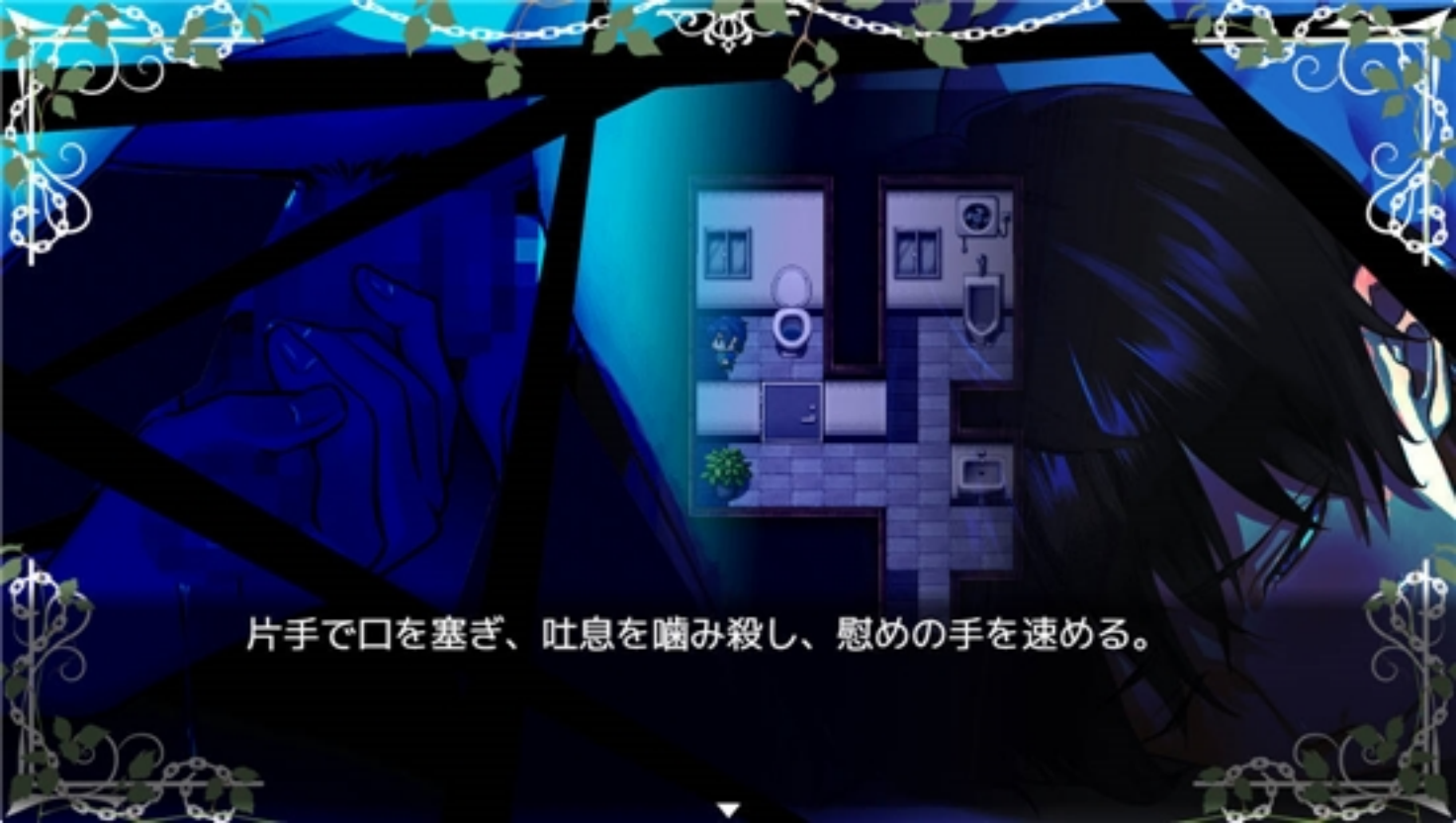
プロローグ
コンティニュー
オプション



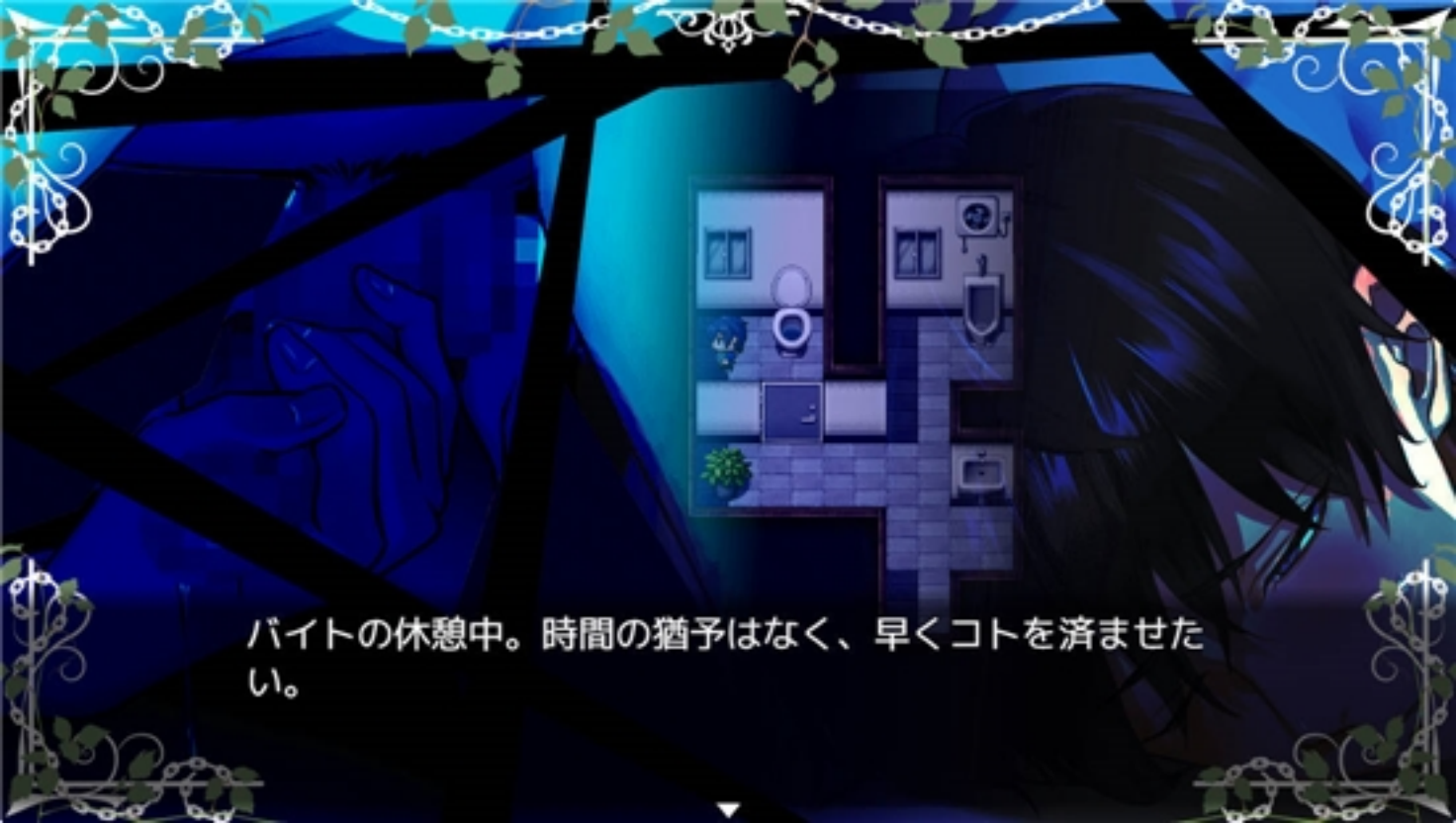
[宮澄マシロ]

(ん、ア…い、っ、きもちィ、も、っと……)

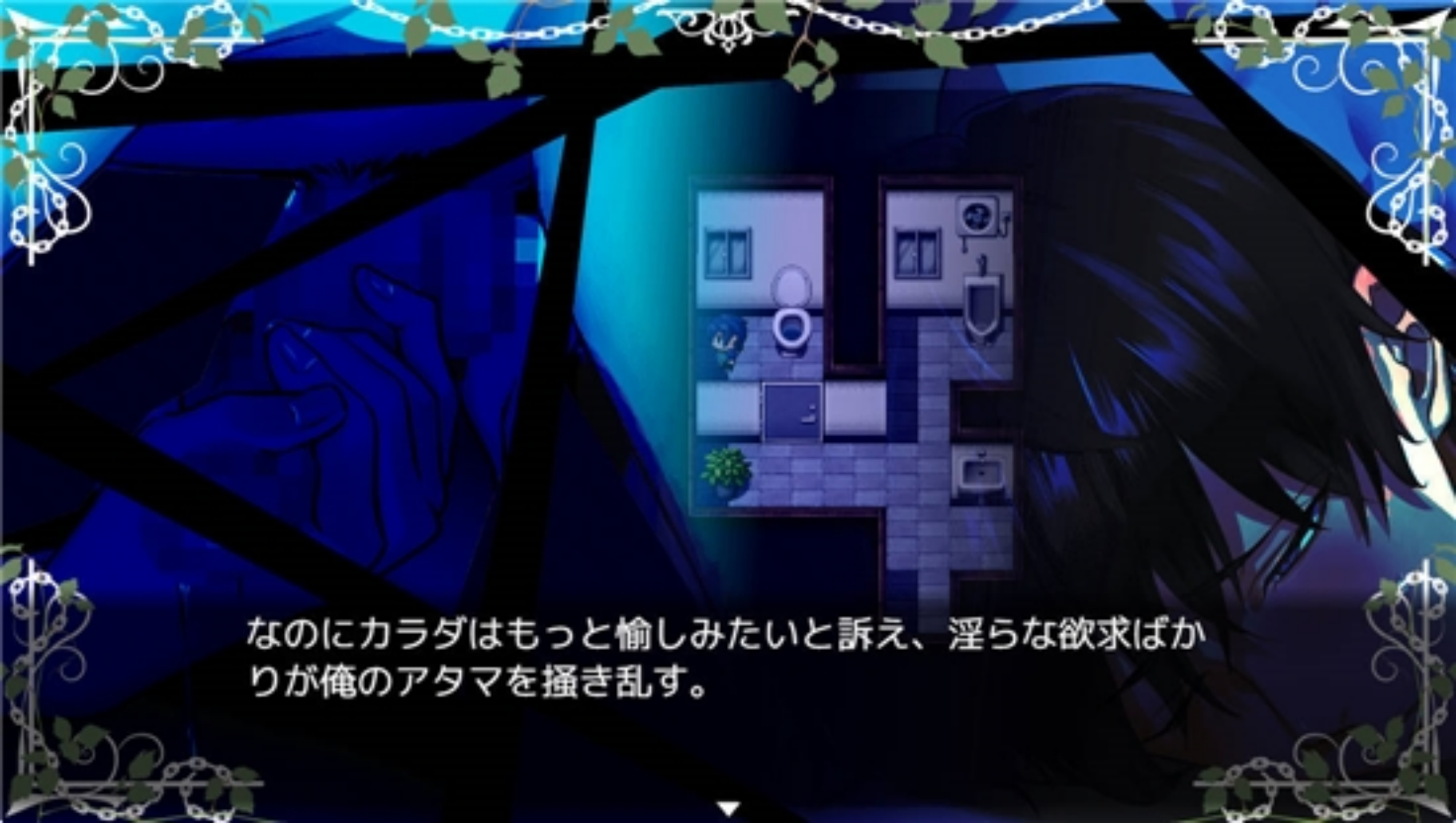




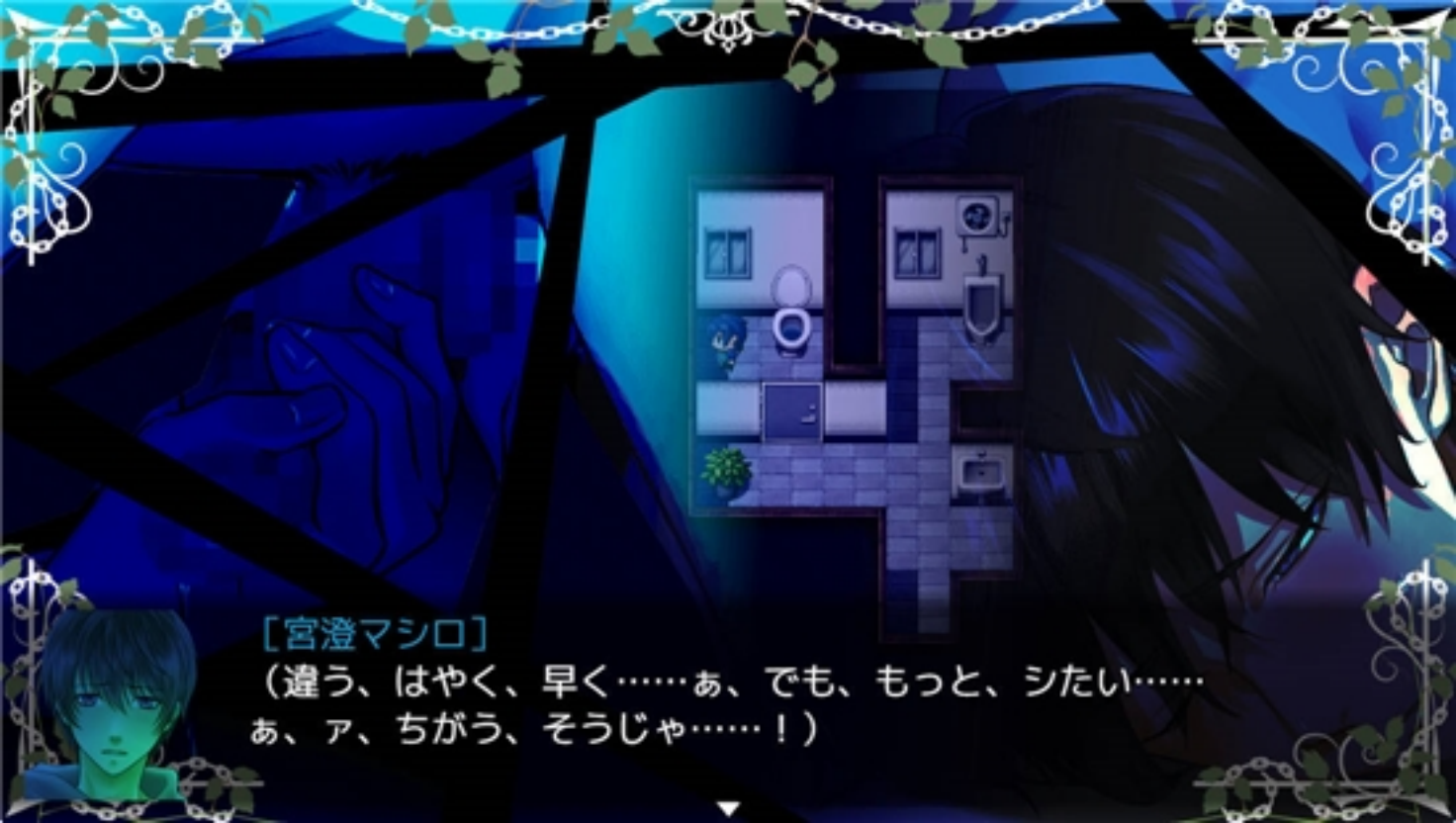
片手で口を塞ぎ、吐息を噛み殺し、慰めの手を速める。



バイトの休憩中。時間の猶予はなく、早くコトを済ませたい。



なのにカラダはもっと愉しみたいと訴え、淫らな欲求ばかりが俺のアタマを掻き乱す。



[宮澄マシロ]

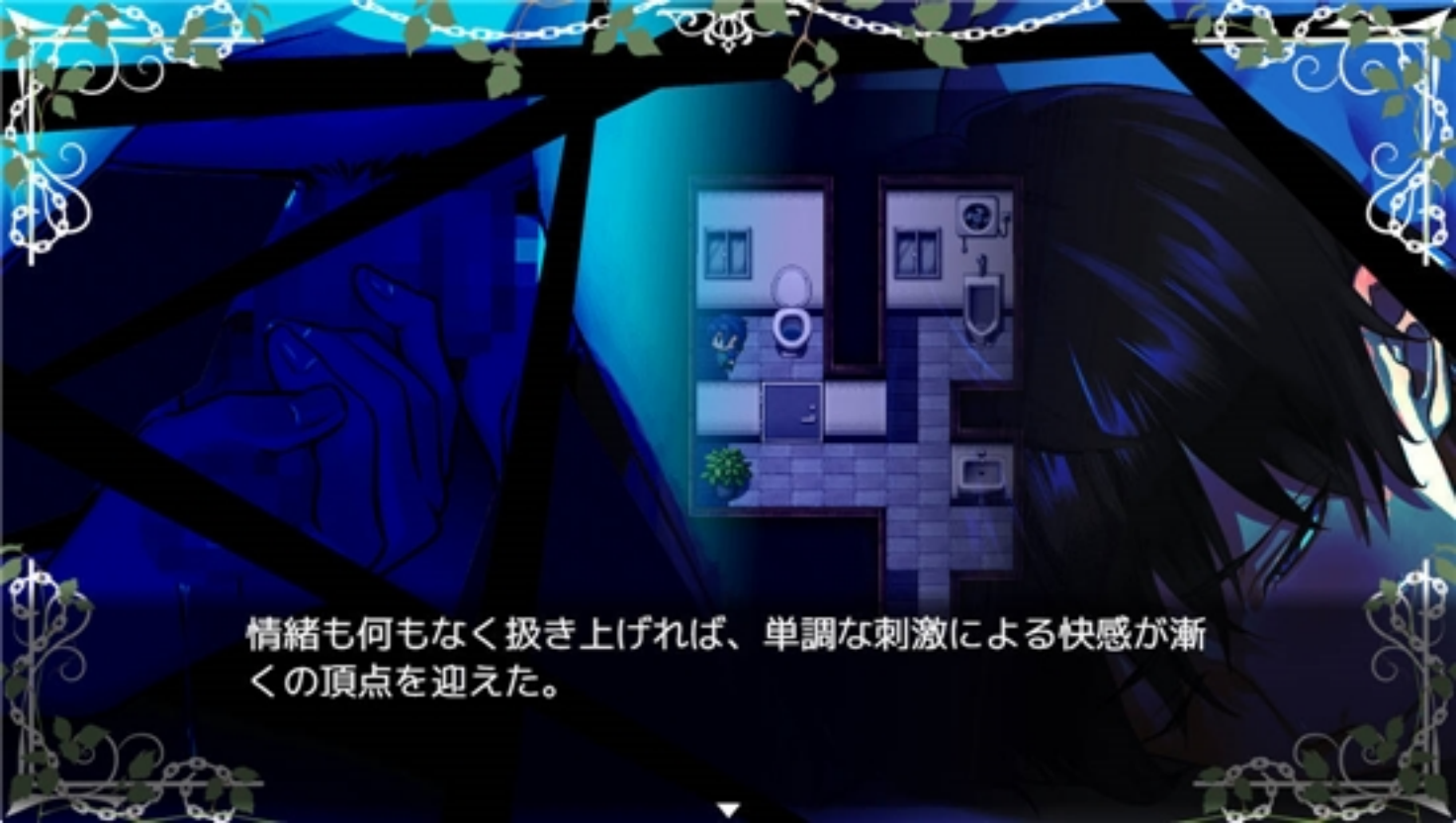
(違う、はやく、早く……あ、でも、もっと、シたい……
あ、ア、ちがう、そうじゃ……！)



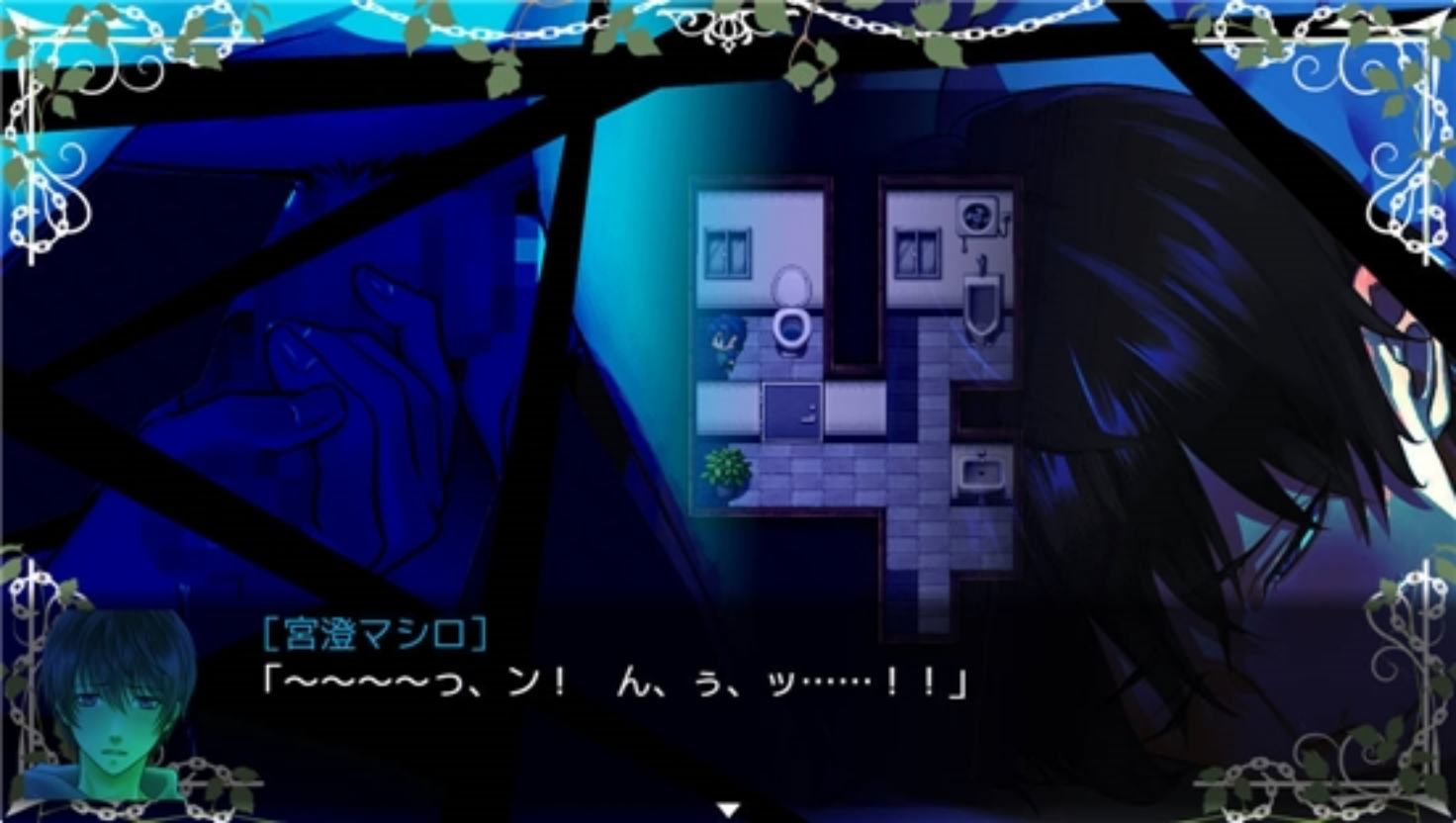


狭いトイレの個室で、形振り構わず屹立を責め立てる。





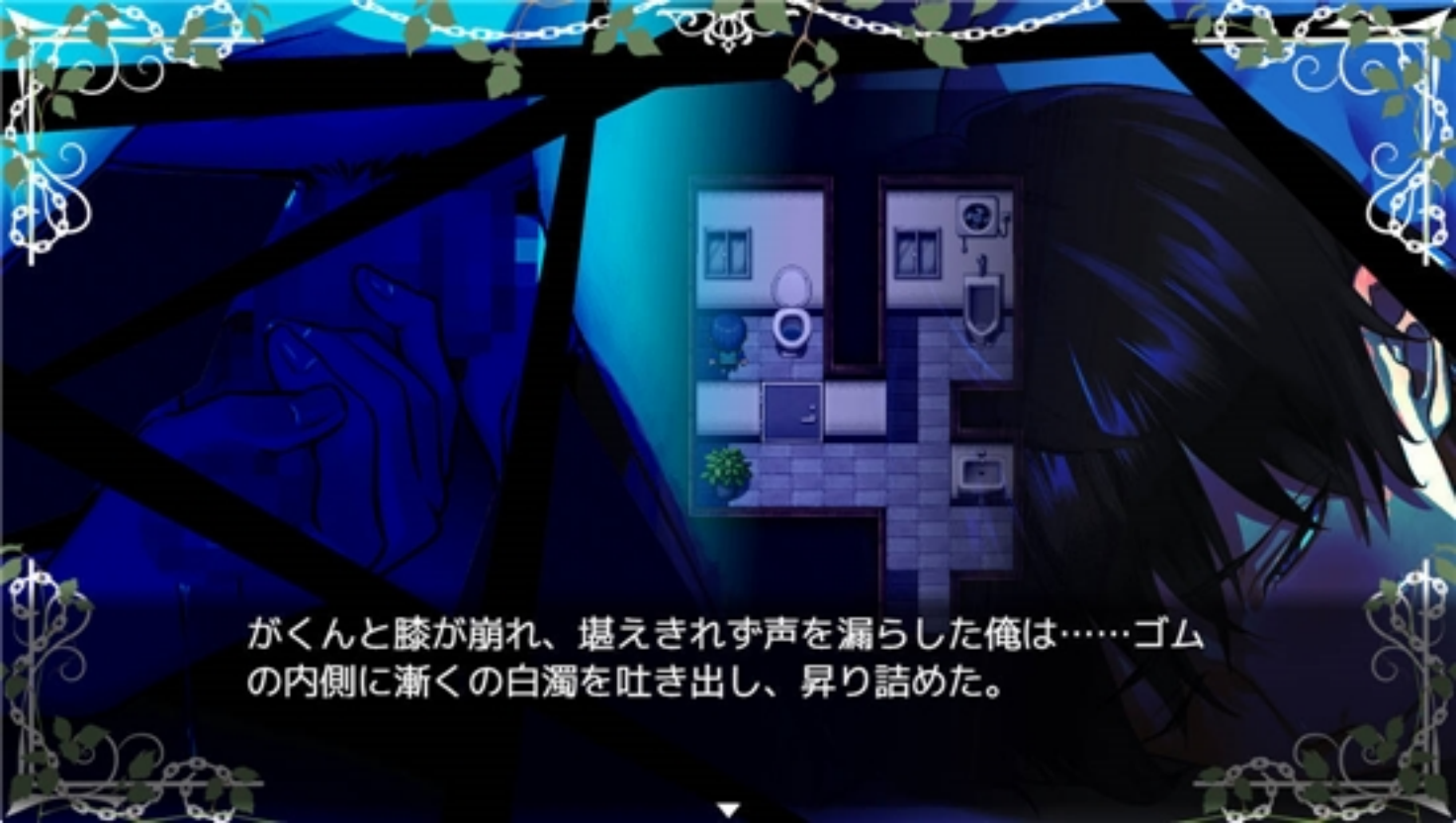
情緒も何もなく扱き上げれば、単調な刺激による快感が漸くの頂点を迎えた。



[宮澄マシロ]

「~~~~っ、ン！ ん、う、ツ……！！」





がくんと膝が崩れ、堪えきれず声を漏らした俺は……ゴムの内側に漸くの白濁を吐き出し、昇り詰めた。



[宮澄マシロ]

(最低だ、俺はどうしようもない……オナニー依存、だ)





夜の帰路でぐったりと肩を落とす。





[宮澄マシロ]

(良さげな短期バイトだったのに……ああもトイレが長い
と、次はないだろうな)





は、と重ったるい息を吐く。





どんよりと沈む思考に耐えきれず、ふるりと力なく首を振った。





[宮澄マシロ]

(ダメだ、こんな所じゃ。いま落ち込んだら、俺は……)






ぎゅっと唇を噛んで、ぐっと淀みを押し込めた。



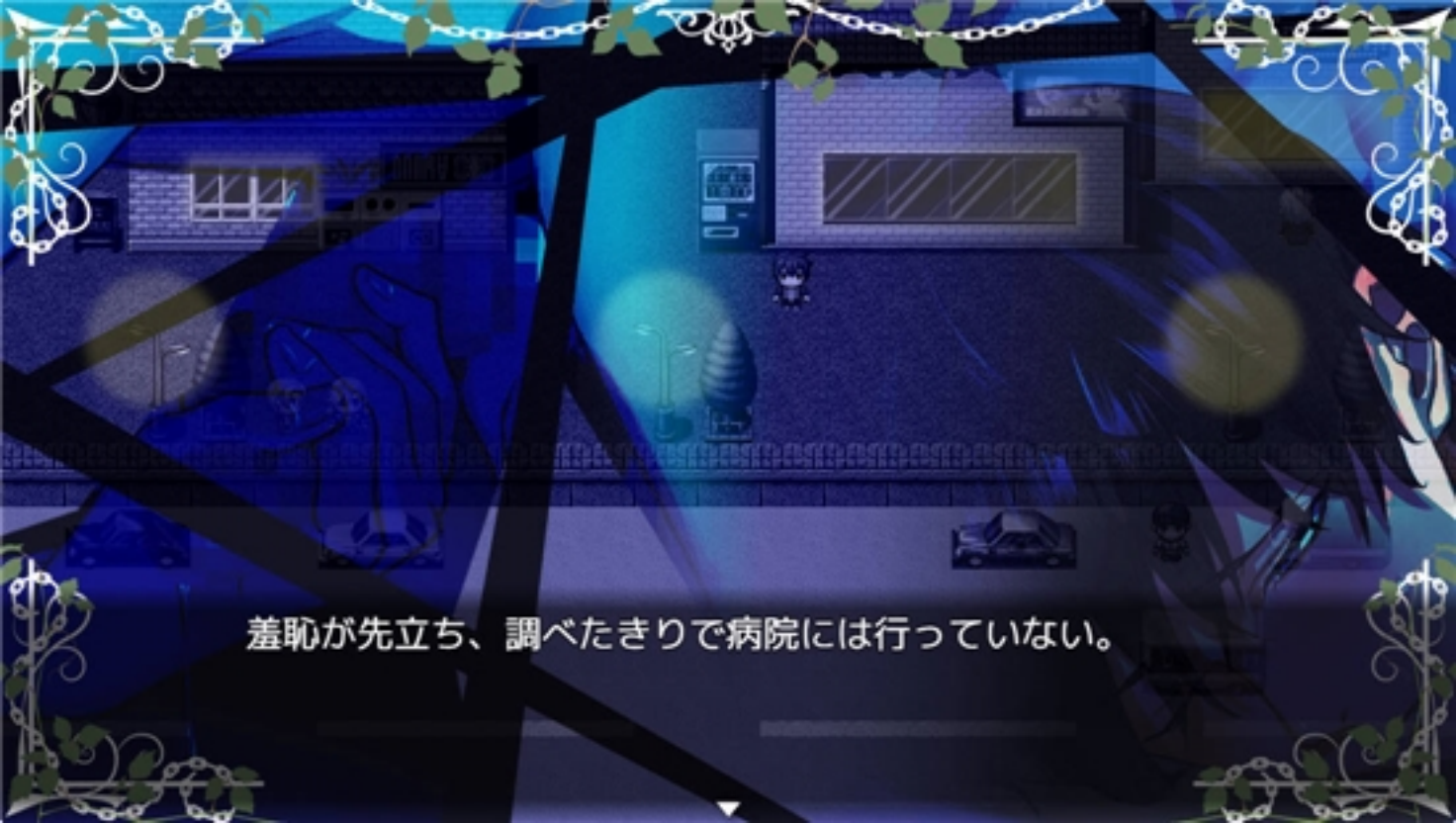
[宮澄マシロ]

(またすぐ……『シたくなる』)

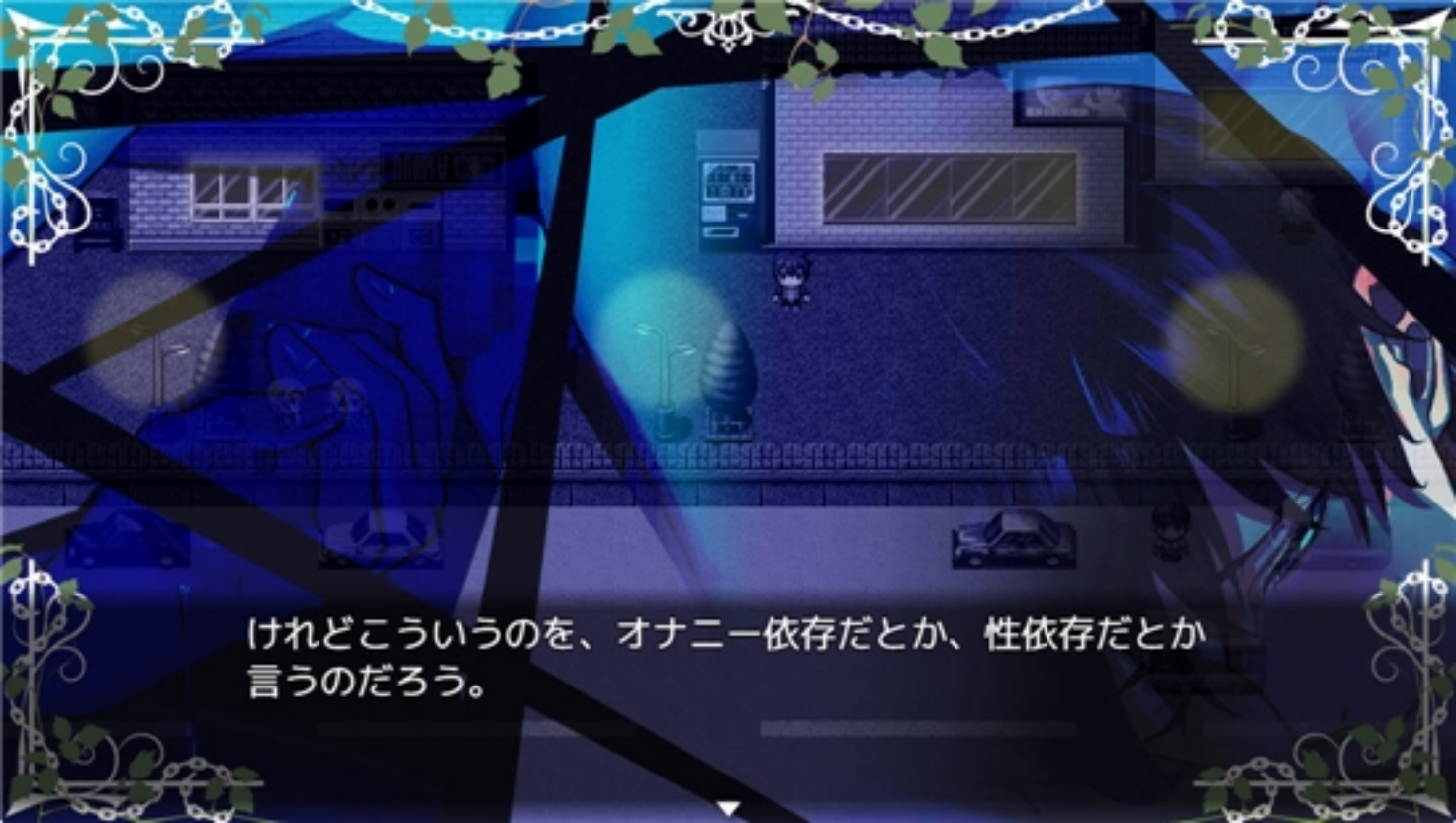




俺は……後悔や不安を覚えたとき、自慰欲求が強まる悪癖があった。



羞恥が先立ち、調べたきりで病院には行っていない。



けれどもこういうのを、オナニー依存だとか、性依存だとか言うのだろう。



[宮澄マシロ]
(ン)





気付いた時にはもう遅く、下腹がずくんと熱を持つ。





耐えかねて視線を彷徨させた先、ショーウィンドウに映る
俺の顔は酷く赤かった。





[宮澄マシロ]

(さっき出しただろ。帰ってからすればいいんだ。なのに
どうして……俺は)





泣きそうになるのを堪え、ぎゅうっと拳を握り込む。





潤む瞳が情けなくて、俺は逃げ出すように場を離れた。





[宮澄マシロ]

(だめだ……何か別のことを考えよう)



ぼんやりとした余所事を頭で探しながら、ふらふらと歩を進める、と。





[宮澄マシロ]

「……どこだ、ここ？」



[???]

「ここはそういう店じゃねえんだ、出てけ！！」





[宮澄マシロ]
「っわ!？」



怒号と共に眼前の扉が開き、柄の悪い男が転がり出て来る。





その一人と強かに激突した俺は、尻から地面に勢いよく落下してしまった。





[宮澄マシロ]

「ついた、ツ!!!」





[男A]

「ンだよッ！ 特殊性癖のバーっつーから覗いてみたのに
よお！！」





[宮澄マシロ]

「!!!」



[ピンク髪の男]

「オメエらみたいなのが居るからココは紹介制なんだ。
おととい来やがれ、じゃねえもう来んな！！」





[男B]

「ああ！！？」



[宮澄マシロ]
(え、え!?)



トクシュセイヘキ。
その単語が出た状況をすぐに噛み砕く暇はなかった。





店から出てきたピンク髪の男が、男連中に鞆を投げ放つ。
それと殆ど同時、店員らしき男がバタバタと出てきた。





[店員風の男]

「モモさん、お店のことは大丈夫ですから……！」





[ピンク髪の男]

「アオイさんが強く出れねえのはしょうがねえ。なら客のオレからでも言わねえと！」





[宮澄マシロ]
(も、揉め事?)



モモと呼ばれた男が怒気をそのままに、アオイという男に向けて声を戻す。





[宮澄マシロ]

(は、早く逃げ出さなきゃ……っ、痛っ)





けれどズキンと腰が痛み、結局その場にへたり込む。





異様な緊張のせいでどくどくと心臓が騒ぎ、キリキリと腹が痛んだ。





[???]

「キミ、大丈夫!？」





[宮澄マシロ]

「え」



と、店から顔を覗かせた別の男が俺の傍へ駆け付ける。





眼前に屈み込んで様子を伺ったあと、男連中から庇う様に壁を作った。





[茶髪の男]

「モモ、通行人が巻き込まれてる。
収めるならお手柔らかにね」





[モモ?]

「あ〜……そうは言ってもよ、トオル」





モモと呼ばれた男が声音を一転させ、困ったようにがりがり
りと頬を掻きむしる。





怯えていた男連中にとって、それが隙に見えたのだろう。
酔っ払い特有の縫れた罵声を上げ、モモたちに飛び掛かろうとする。





[宮澄マシロ]

「あ、ぶない!!!」





[男B]

「っわ!!! ツ、んだこれ!!!」





[男A]

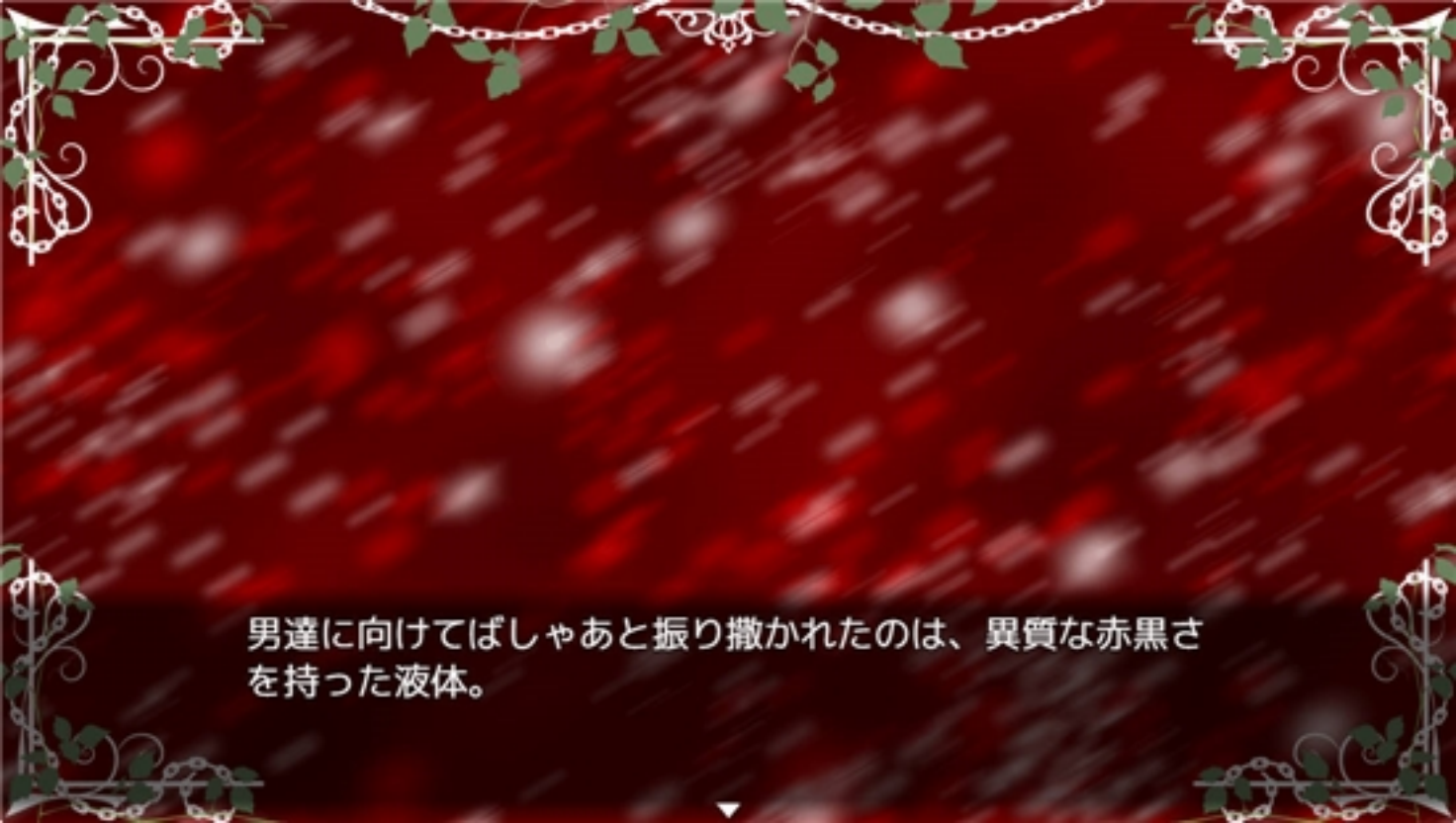
「っ、ぶはッ!!!」





[宮澄マシロ]
「!!!?」





男達に向けてばしゃあと振り撒かれたのは、異質な赤黒さを持った液体。











呆然とする俺と男連中の前に、突然の人影が躍り出た。





[???]

「モモトオルも、穏便すぎんだよ」





[モモ?]
「サンゴ!？」





[宮澄マシロ]

(ま、また別の人……！？)





たった今サンゴと呼ばれた黒髪が、容器を楽しげに振りながらケタケタと笑った。





エキセントリックな様相に怯える男連中を一瞥してから、
ゆっくりと、楽しげに謳い上げる。





[サンゴ?]

「なあ、アンタら。オレのトクベツな趣味と関係あるコレ、
何だか当ててみるよ」





[男B]

「っ、な……」





[宮澄マシロ]
(え……)



トクベツな趣味、を強調したサングが、それはそれは恍惚
とした笑顔で告げた。





[サンゴ?]

「オレねえ、血液とかスプラッタとか、だייםす——」



[男A・B]

「っ、っわあああああ！！？」





と、聞くや否や引き攀った声をあげて後ずさった男連中が、どたばたと路地の向こうへ散っていった。





[宮澄マシロ]

「……」



静けさが戻った路地に残された俺もまた、道路に点在した赤黒い染みに視線を止め……。





[宮澄マシロ]
「……っ」





[トオル?]

「大丈夫だよ、これは偽物」





[宮澄マシロ]

「！！」



[トオル?]

「だよね、サンゴ」





身を凍らせる俺をトオルが覗き込み、小さく謝罪してから
サンゴに声を投げる。



[モモ?]

「あ～、サンゴまたせこせこ自作してたのかよ」





[サンゴ?]

「せこせこってゆーなよ！ オレの店でスプラッタフェアやるから、コレは商売道具！」





[宮澄マシロ]
「……にせもの」



[モモ?]

「ああ。にーちゃんのカオ真っ青にさせちゃったな」





[宮澄マシロ]

(.....)





漸く意味を噛み砕いた俺は、改めて周囲の液体に視線を巡らせてみる。





……幸い俺に飛び散る事のなかったソレは、俺に飛び散らなかったというより、きっとサンゴがそうならないよう加減したのだろう。





[宮澄マシロ]

(わるいひとたち……じゃないんだ)





[サンゴ?]

「ホント、ワリかった。にーちゃんまで怖がらせて」





[宮澄マシロ]

「え」



俺の傍にしゃがみ込んできたサンゴが、へにやりと眉を下げる。





さっきと違ってちっとも怖くない仕草に、気が抜けるとともに申し訳なさが湧き上がった。



[宮澄マシロ]

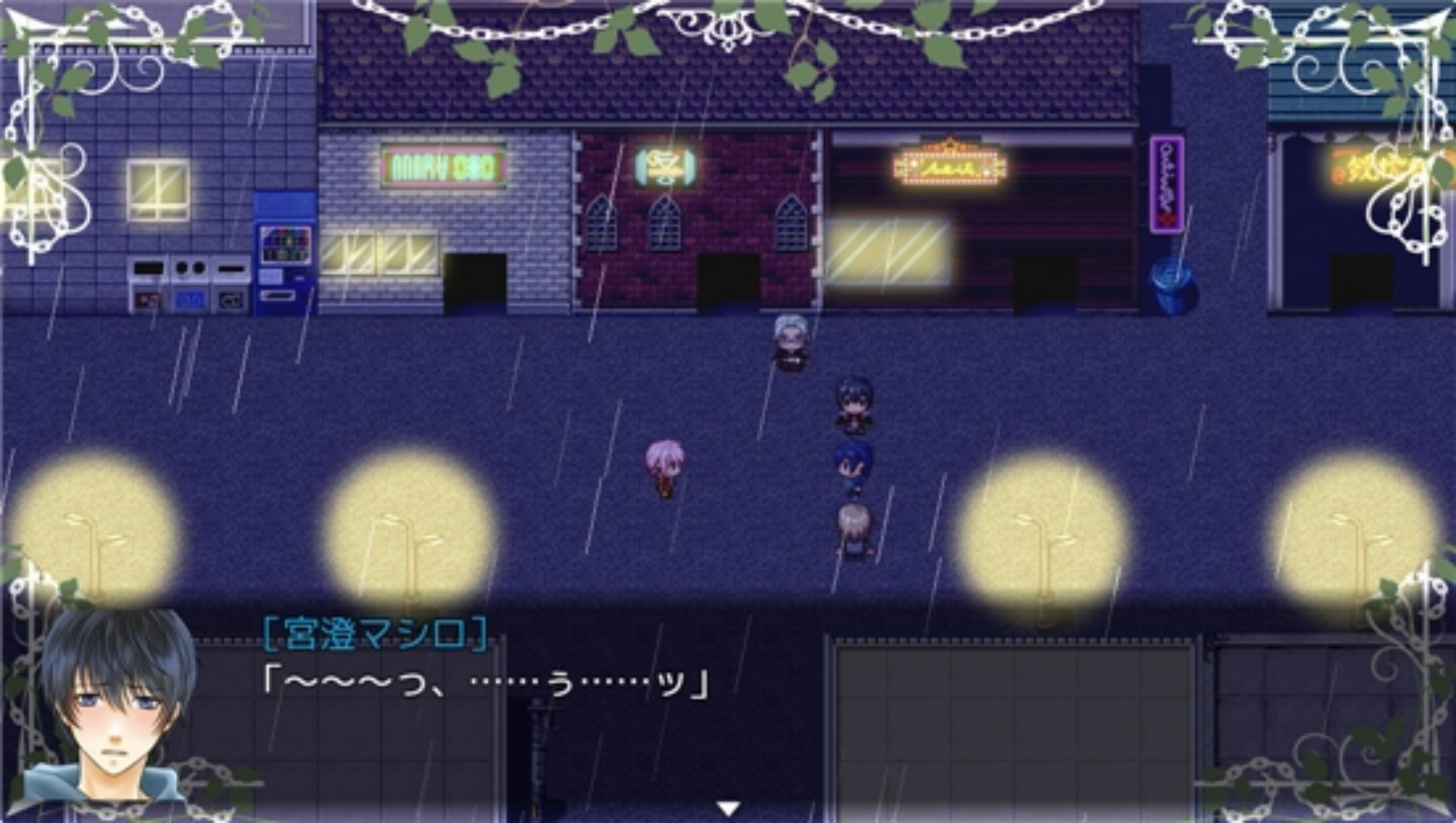
(俺は大丈夫だって……ちゃんと、早く言わなきゃ)






その言葉を紡ごうとした俺は、口を開きかけて……。






[宮澄マシロ]


「~~~~つ、……う……ツ」



[???


「っ、にーちゃん!？」






[???]


「大丈夫か……って、おい！！」

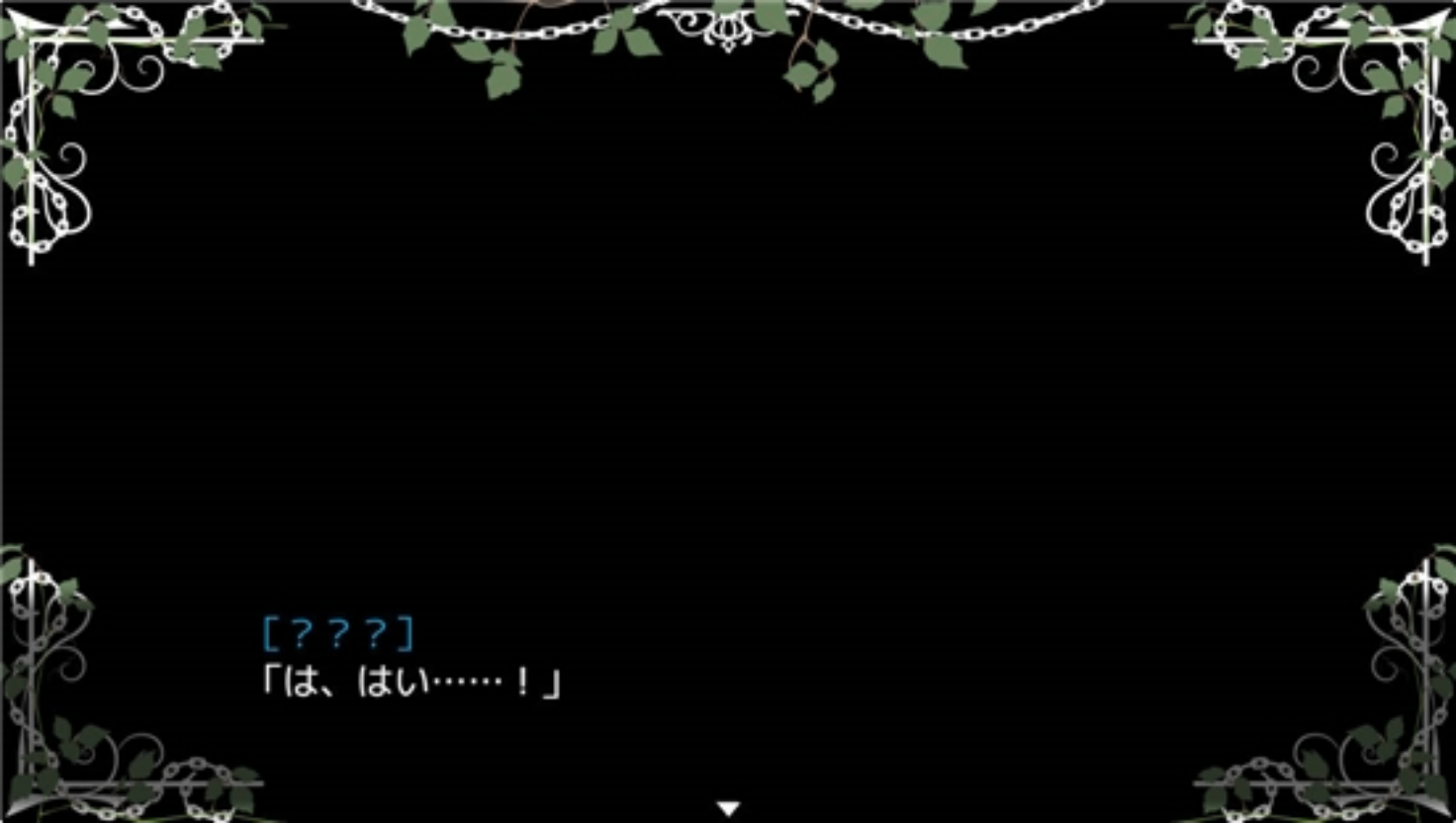




[???]


「アオイさん、このコを中に！」

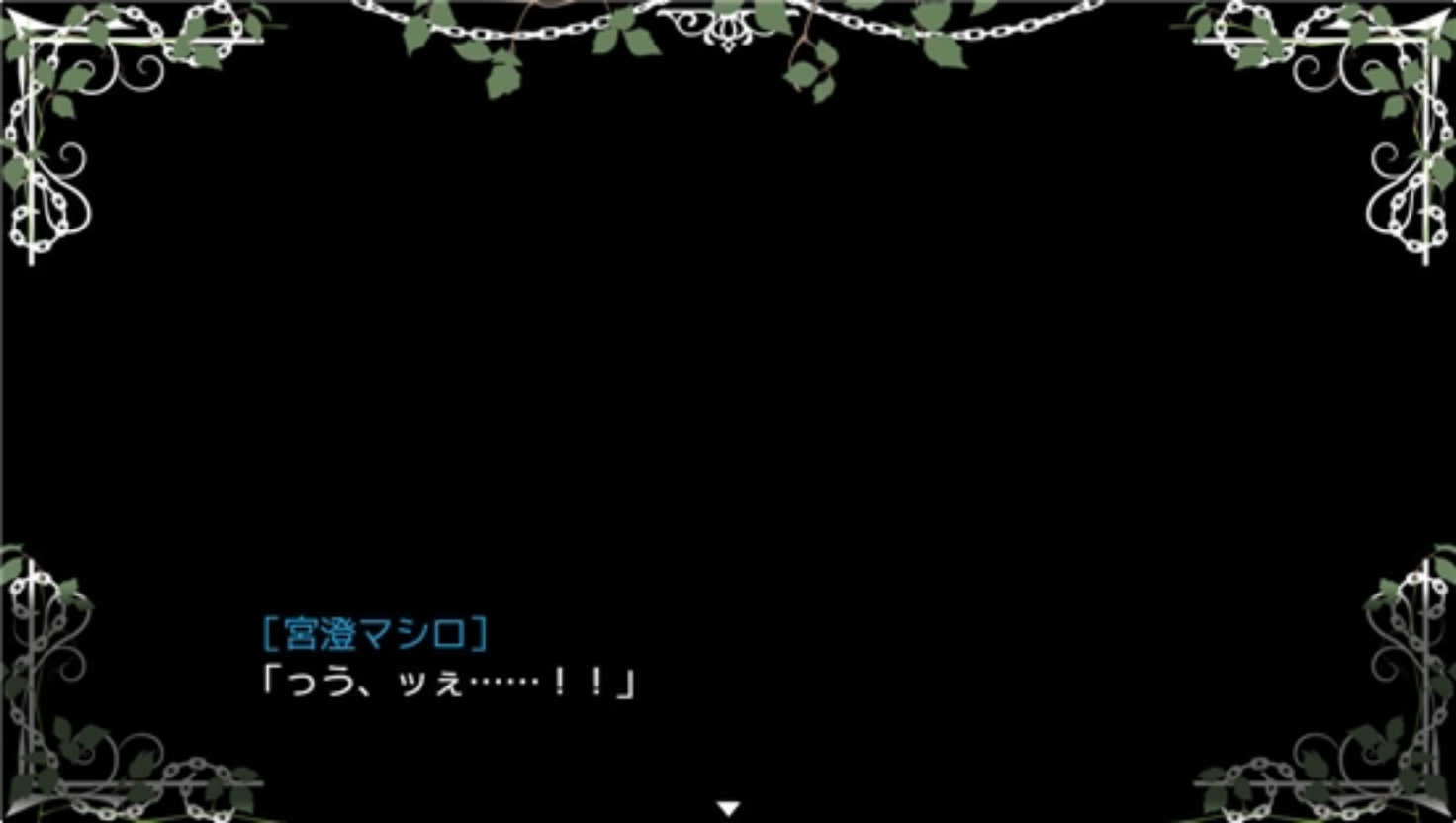




[???

「は、はい……！」



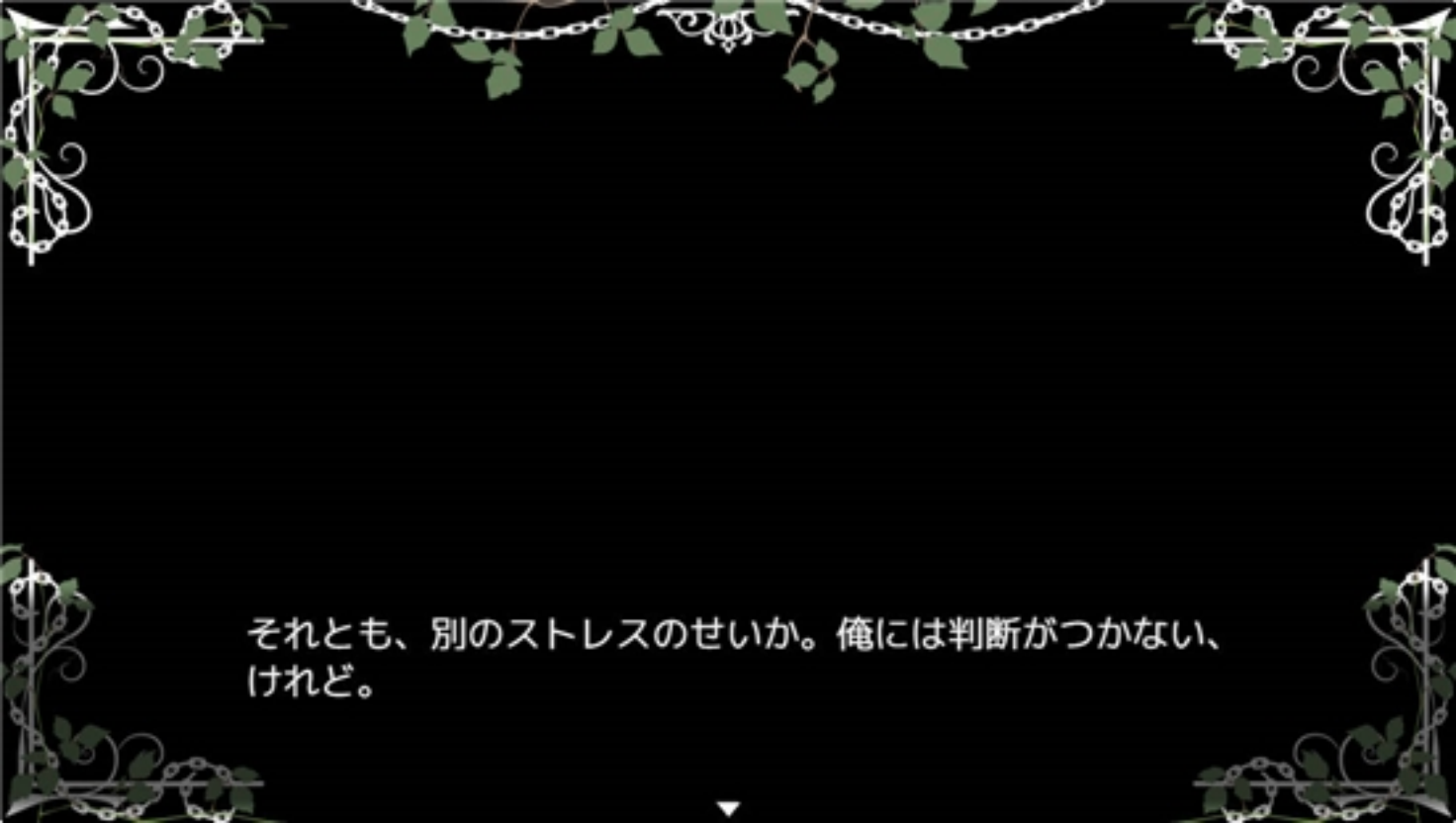
A decorative border of white and green vines with leaves frames the top and bottom corners of the page. The background is black.

[宮澄マシロ]
「っう、ツえ……！！」


A decorative border of white and green vines with leaves and a chain-like pattern runs along the top and sides of the page.


……思っていた以上に緊張していたのだろうか。






それとも、別のストレスのせいかな。俺には判断がつかない、
けれど。





[宮澄マシロ]


(ずっと、くるしかったきがする……けどもう……わからないや)



A decorative border of white and green vines with leaves frames the top and bottom of the page. The background is black.

空っぽの胃から競り上がる不快感を、地面にぶち撒ける。





くらくらと視界が昏く沈む中で、周りからは騒がしい声が響き続けていた。





ファイリアに集う
羊たちの唄

[???]

「もう大丈夫ですか？」





[宮澄マシロ]
「……は、い」





キィと扉を開き、化粧室から顔を覗かせる。



扉のすぐ傍で、アオイと呼ばれていた店員がほっと安堵の色を見せた。



[宮澄マシロ]

「す、みません。お店の前で迷惑……」





【店員風の男】

「いえ。迷惑と言うなら、うちの店こそ謝らないと」



[宮澄マシロ]
「うちのみせ？」





[店員風の男]
「ええ」





[宮澄マシロ]

「……！」





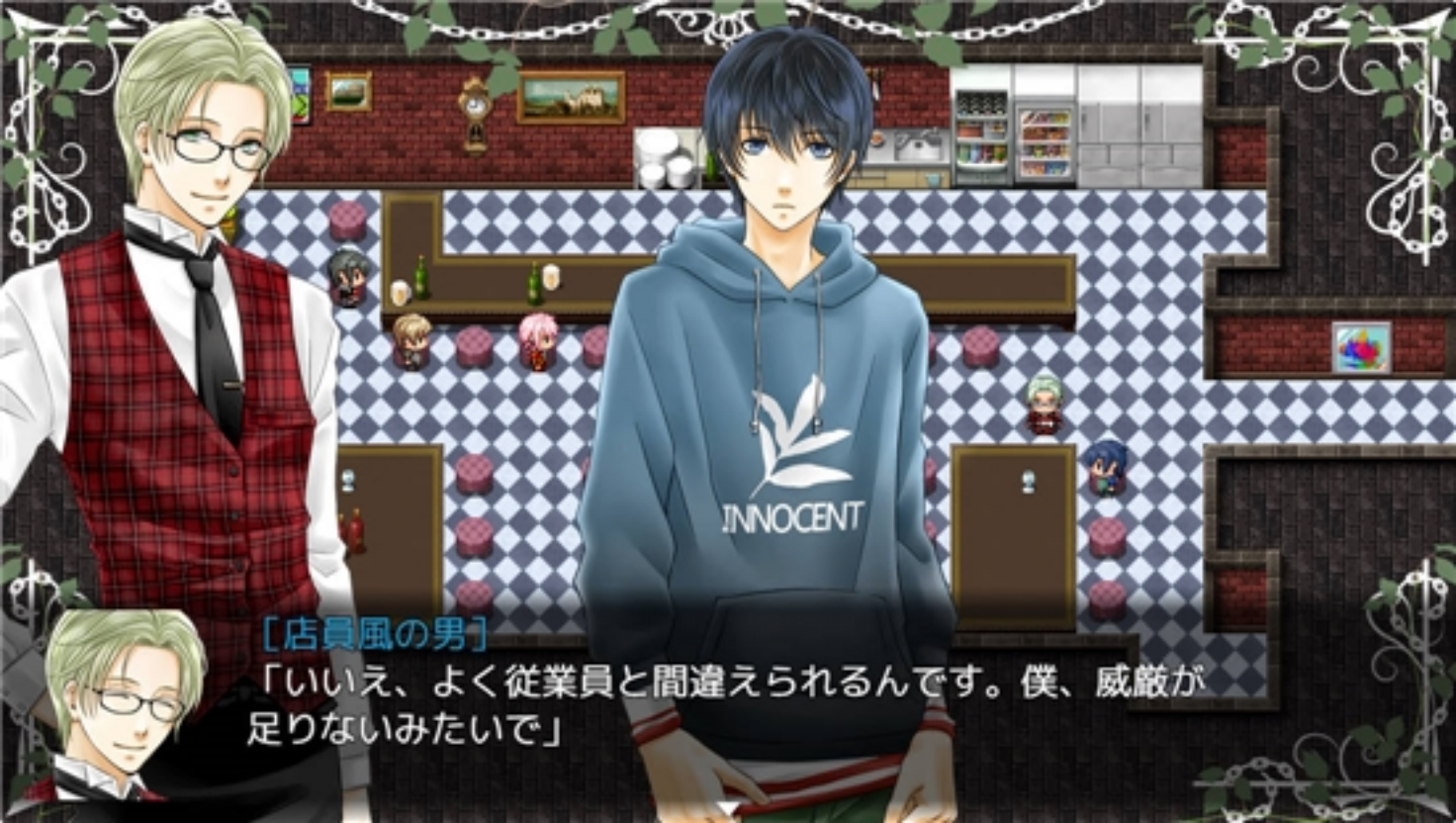
そうと言われ、やっと勘違いに気付いた俺は慌てた声を上げる。



[宮澄マシロ]

「ご、ご、ごめんなさい！」



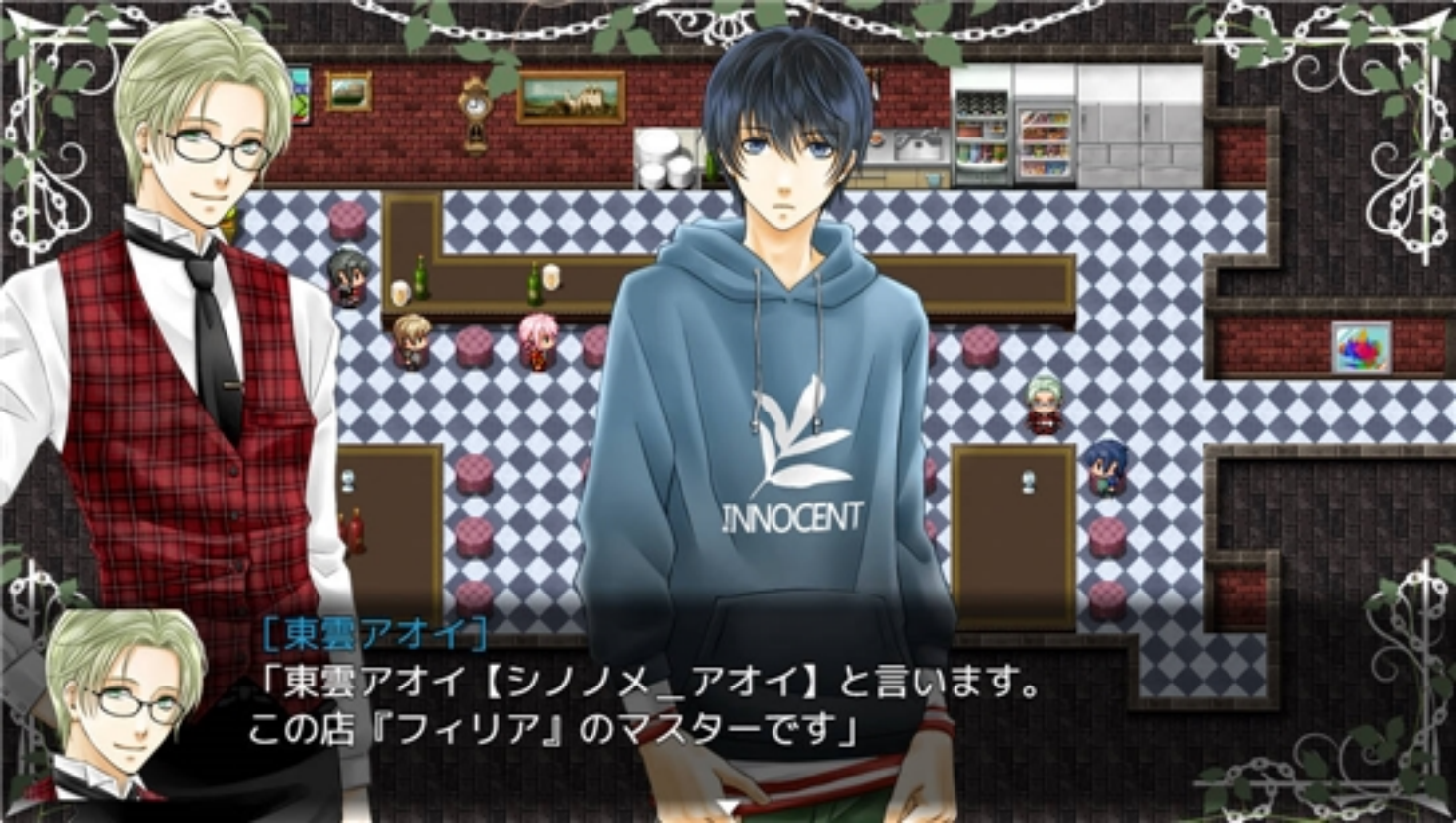


【店員風の男】

「いいえ、よく従業員と間違えられるんです。僕、威厳が足りないみたいで」



くすくすと笑みを零されたあと、改めまして、と先を続けた。



[東雲アオイ]

「東雲アオイ【シノノメ_アオイ】と言います。
この店『フィリア』のマスターです」



[宮澄マシロ]
「フィリア……」





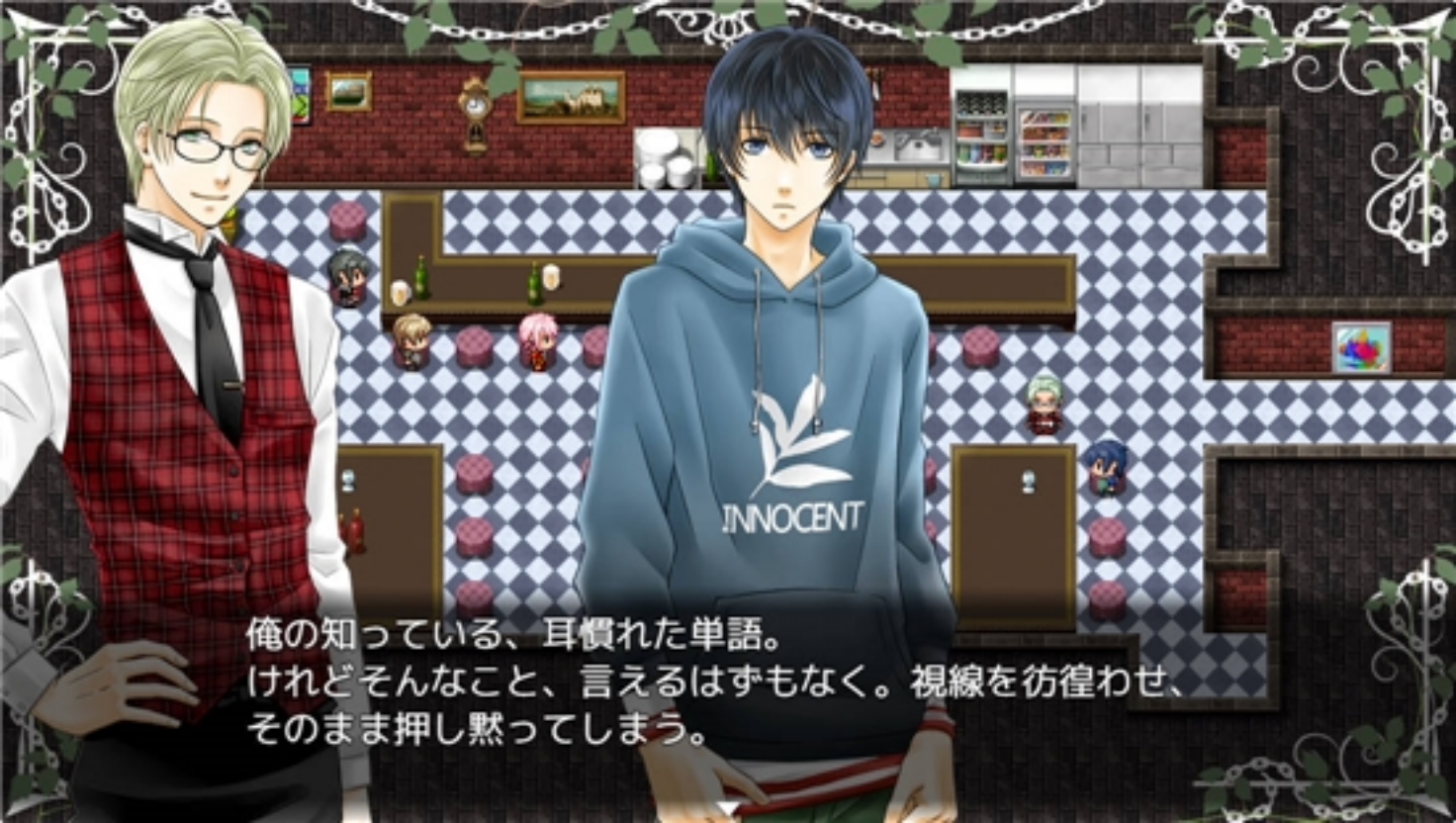
[東雲アオイ]

「性癖という意味です。耳慣れないですよね」



[宮澄マシロ]
(……そんなことない)





俺の知っている、耳慣れた単語。
けれどそんなこと、言えるはずもなく。視線を彷徨わせ、
そのまま押し黙ってしまう。



[モモ?]

「お。にーちゃんもう大丈夫か？」





[宮澄マシロ]

「!!!」





と。遠くのカウンターから、わちゃわちゃとした声が投げられてきた。



[トオル?]

「色が随分落ち着いたね、良かった」





[サンゴ?]

「ワリ、ビックリさせてほんっとワリかった！」





[宮澄マシロ]
「え、え！！」





あれやこれやと、一気に浴びせられる言葉にずさりと後ずさる。





騒がしくてすみませんと苦笑したアオイさんが、俺をカウンター席へと促してくれた。





[東雲アオイ]

「立ち話も悪いですし、どうぞ座ってください」





[宮澄マシロ]

「あ、ありがとう……ございます」





[東雲アオイ]

「何か暖かいものでも飲みませんか。えっと……」





【宮澄マシロ】

「あ……宮澄マシロ【ミヤズミ_マシロ】です。色々良くして貰って……その」





今一度の謝罪を制される形で、離れた席に座るモモが小さく手を上げる。





[モモ?]

「にーちゃん、マシロっていうのか。ならオレらも自己紹介」





[宮澄マシロ]

「あ」





【塙田モモ】

「オレは塙田モモ【ハナダ_モモ】。で、このポーズとしてんのが鶺野トオル【ヒワノ_トオル】」





[鵜野トオル]

「ポーッと酷いな。よろしくね」





[塙田モモ]

「で、この妙な液体ブチ撒けたヤローが黄橡サンゴ
【キツルバミ_サンゴ】」



[黄橡サンゴ]

「よろしくな、っておいモモ！ だからワリかったって
ば！」





[宮澄マシロ]

(て、適当だ……けど仲がいい、みたいだ)





[塙田モモ]

「暖かいモンなら、ホットミルク、ホットミルクケーキあたりがいいか？」





モモがひょいっとメニューを差し出してくれる。



[宮澄マシロ]

「ありがとう……ございます」





[塙田モモ]

「他にもノンアルはあるけど、冷たいモンは胃が落ち着いてからがいい」





[宮澄マシロ]

「お、俺お酒は飲める年齢なんですけど」





[塙田モモ]
「は？」





少しだけむっとした俺に、モモが目を丸めたかと思えばトオルがくすりと笑った。



[鵜野トオル]

「違うよ、モモは君のおなかの調子を心配してるの」





[宮澄マシロ]

「あ！」



【黄橡サンゴ】

「まーでも、オレもマシロは未成年かなってちょっと思っ
た」





[宮澄マシロ]

「ちゃ、ちゃんと21歳です！ で、でも気遣ってくれたのに……すみません」



[塙田モモ]

「あ～、気にしねえよ。あと、敬語とかそーいうのもナシ」





[宮澄マシロ]

「わ！」



ぽん、と軽く背を叩かれてどきりとしてしまう。



他人とバイト以外で話すなんて久しぶりで、夜遊びだっ
たことがない。





[宮澄マシロ]

(バイトが終わったら直帰してオナニーだもんな、俺……)





我ながら呆れつつ、にこにこと俺に接するモモたちを脇目で眺める。





こんな気安い空気は不慣れなのに、不思議と悪い気がしないのはどうしてだろう。





[宮澄マシロ]

「……」





[鵜野トオル]

「マシロ、どうしたの」





[宮澄マシロ]

「あ、すみま……じゃなくて、ご、ごめん」





ぼうっとしてしまった拙さに気づき、慌ててメニューに視線を戻す。





[宮澄マシロ]

「あ、甘いほうがいいから……ホットミルクセーキで」





【鵜野トオル】

「だって。アオイさん、よろしく」





[東雲アオイ]
「はい」





[黄橡サンゴ]

「甘い好きなのか、やっぱりホントはコード……」





[塙田モモ]

「サンゴ、オマエは思ったことまんま言いすぎ」





[東雲アオイ]

「では、少しお待ちくださいね」





アオイさんが一礼して、店の奥へと静かに消える。





と、モモが俺の肩まで手を伸ばし、ちょっと突っ突いたことで弾かれたように振り返った。





[宮澄マシロ]
「っわ！」





[塙田モモ]

「っと、びっくりさせたか。マシロ、ちょっといいか」





[宮澄マシロ]

「え……なっ、なに？」





[塙田モモ]

「そんな構えなんて。あのな、さっきのは店側は悪くねえんだ」





[宮澄マシロ]
「さっきの？」





言われ、きょとんと目を丸めてしまう。





けれどそれが店前での揉め事だと気付いた俺は、あ、と小さな声を上げた。





[埴田モモ]

「アオイさんは相当穩便に済ませようとしてた。オレらの
追い出し方が悪かっただけ」





[塙田モモ]

「だから、謝るのはオレらだ。マシロ、ごめんな」





[宮澄マシロ]

「え」





[鵜野トオル]

「ん、オレからも謝るよ」





[宮澄マシロ]

「え、ええ!？」





モモに続いて飄々と告げたトオルが、その声音とは異なる
真摯な仕草で頭を下げる。





[黄橡サンゴ]

「待て待て、アレぶち撒けたオレが一番ワリかったんだっ
て！」





[宮澄マシロ]

「そ、そんなこと!!」





[黄橡サンゴ]

「だってオマエ、吐いちゃったじゃねーか」





【宮澄マシロ】

「そ、れは……仕事とか、別のストレスで」





[黄橡サンゴ]

「けど、アレで拍車かかったのはあるだろーが」





[宮澄マシロ]

(な、なんか謝罪大会になってる……！)





どう収めていいのかわからず戸惑う俺に、あのね、とトオルの静かな声が届く。





【鵜野トオル】

「皆、ここが特殊性癖の店だから怖いんじゃないって弁解
したいんだ」





[宮澄マシロ]

「あ……」





【鵜野トオル】

「それにサンゴだって、普段は滅多にあんなことしない」





[埴田モモ]

「滅多にってのがまあ……サンゴの性格の問題なんだけどな」





[黄橡サンゴ]

「は！？ なーもも、フォローになってなくね！？」





【鵜野トオル】

「今回のアレは、ちょっとフォローを入れ難いかな」





[黄橡サンゴ]

「そーだけどよ……だからワリかった、って」





[宮澄マシロ]

「こ、怖いなんて思ってない！！」





[鵜野トオル]

「!」



[埴田モモ]

「!？」





遮るように声を張れば、一様の視線がこちらを向く。





少しだけぐっと声を詰まらせてしまったけれど……衝き動かされるように口を開いた。





[宮澄マシロ]

「こ、わくない……だって、おれ……俺、も」





[黄橡サンゴ]
「マシロ？」





【宮澄マシロ】

「俺も、性癖じゃないけど……依存持ちなんだ。
だから……わかる」





[塙田モモ]
「え？」





[鵜野トオル]

「！」





[黄橡サンゴ]

「へ!？」





[宮澄マシロ]

「……っ、……」





バカだ、俺は。誰にも言えなかったのに。初対面なのに、
どうして。





[宮澄マシロ]

(……でも……だけど)



気づけば喉から押し上げられるように、言葉が溢れてしまっていた。





[宮澄マシロ]

「俺、だって……あんな風に言われたら……嫌だ、って
思った」





【宮澄マシロ】

「もし、自分がアレを言われた時に怒って貰えたら……
嬉しい、と思う」





[鵜野トオル]

「……」



【宮澄マシロ】

「だからみんなのこと、怖くない。いいひとだ、って思った」





[黄橡サンゴ]

「っ」





【宮澄マシロ】

「だからこの店も、きっといい場所だって思う。
だから……だから」

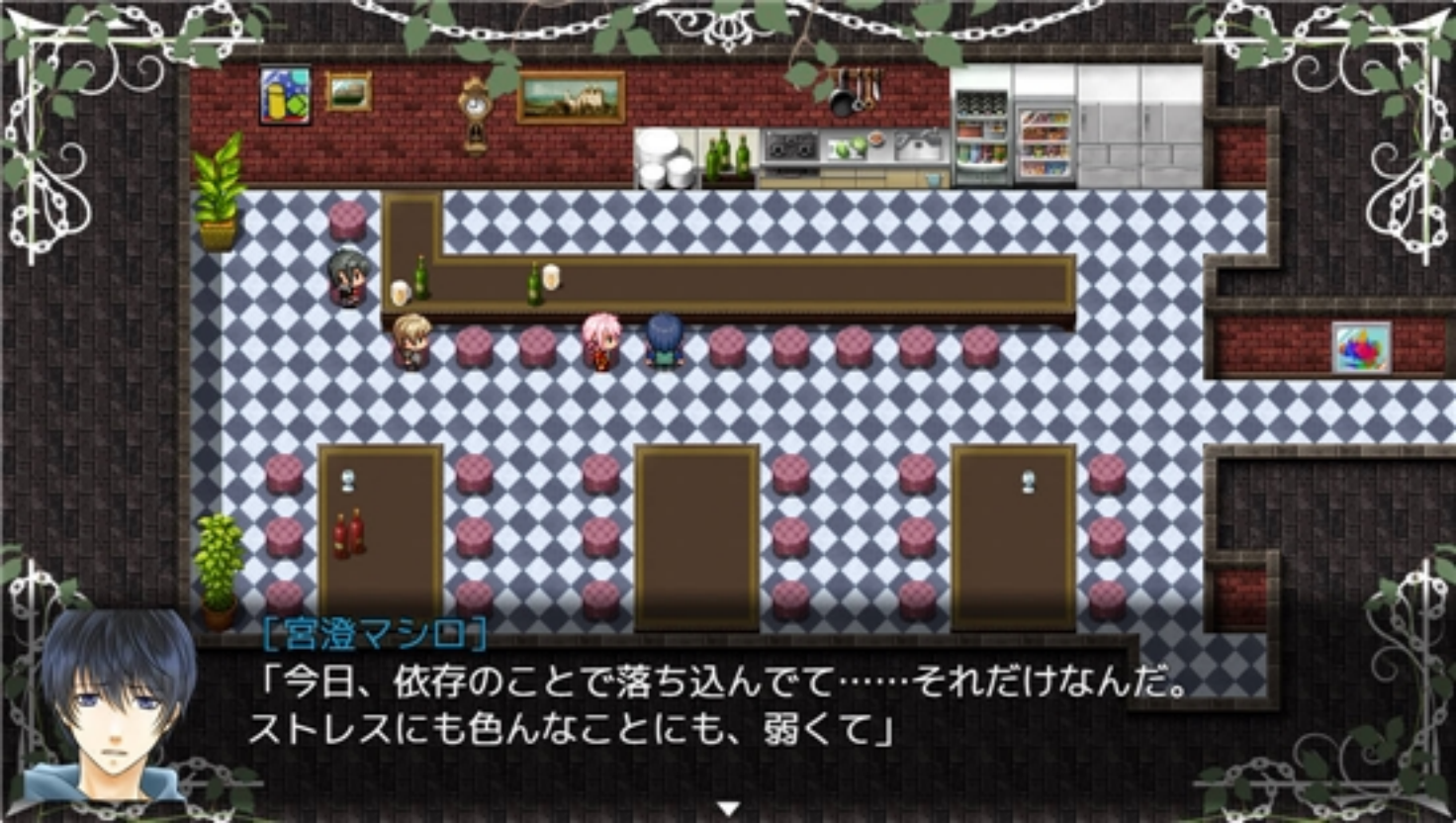




[塙田モモ]

「……マシロ」





【宮澄マシロ】

「今日、依存のことで落ち込んでて……それだけなんだ。
ストレスにも色んなことにも、弱くて」






驚き、息を飲むモモたちの視線が注がれる。
その視線が否定を示すのが怖くて、俺は逃げるように目を
伏せた。





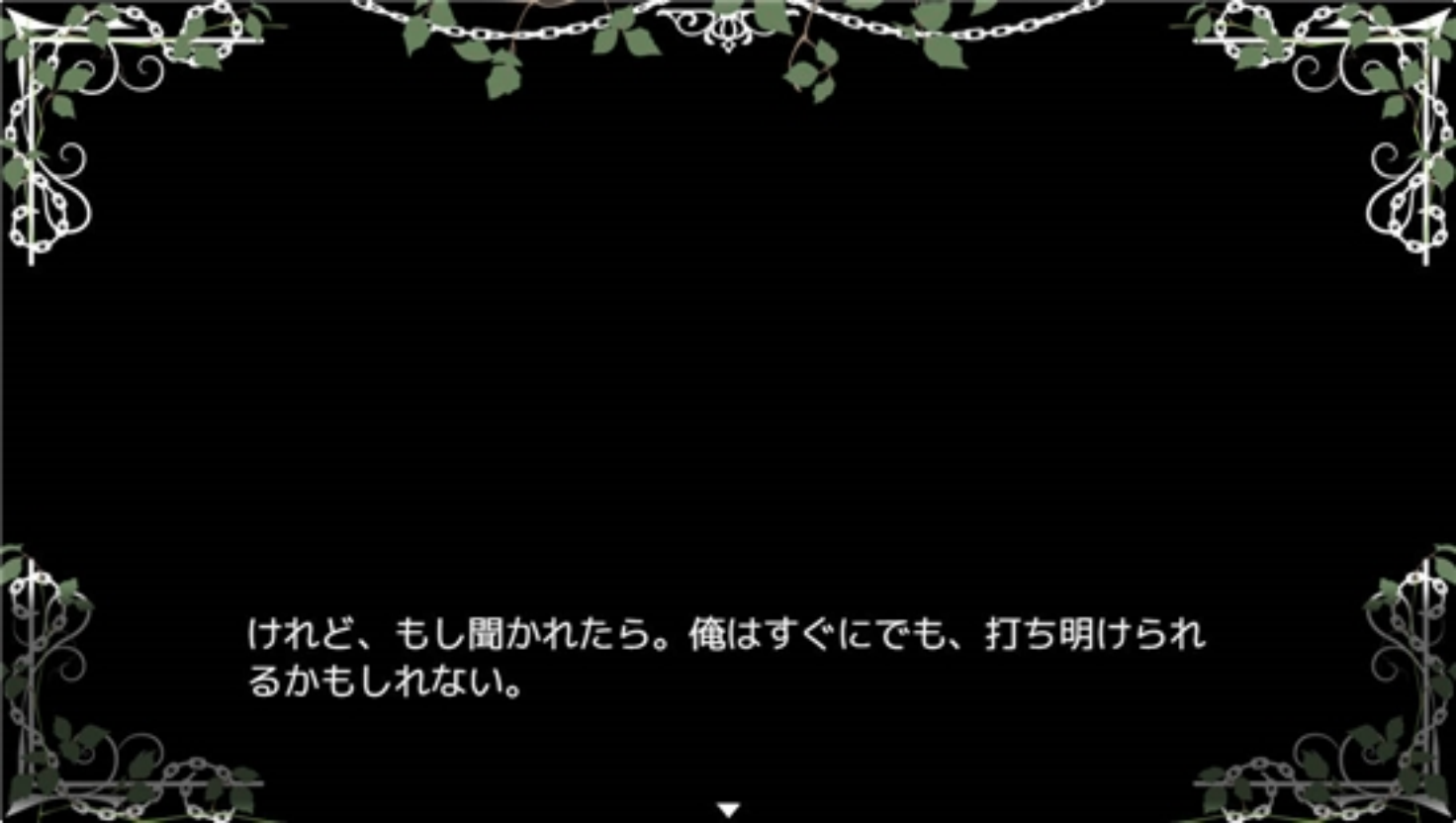
[宮澄マシロ]
(……言ってしまった)





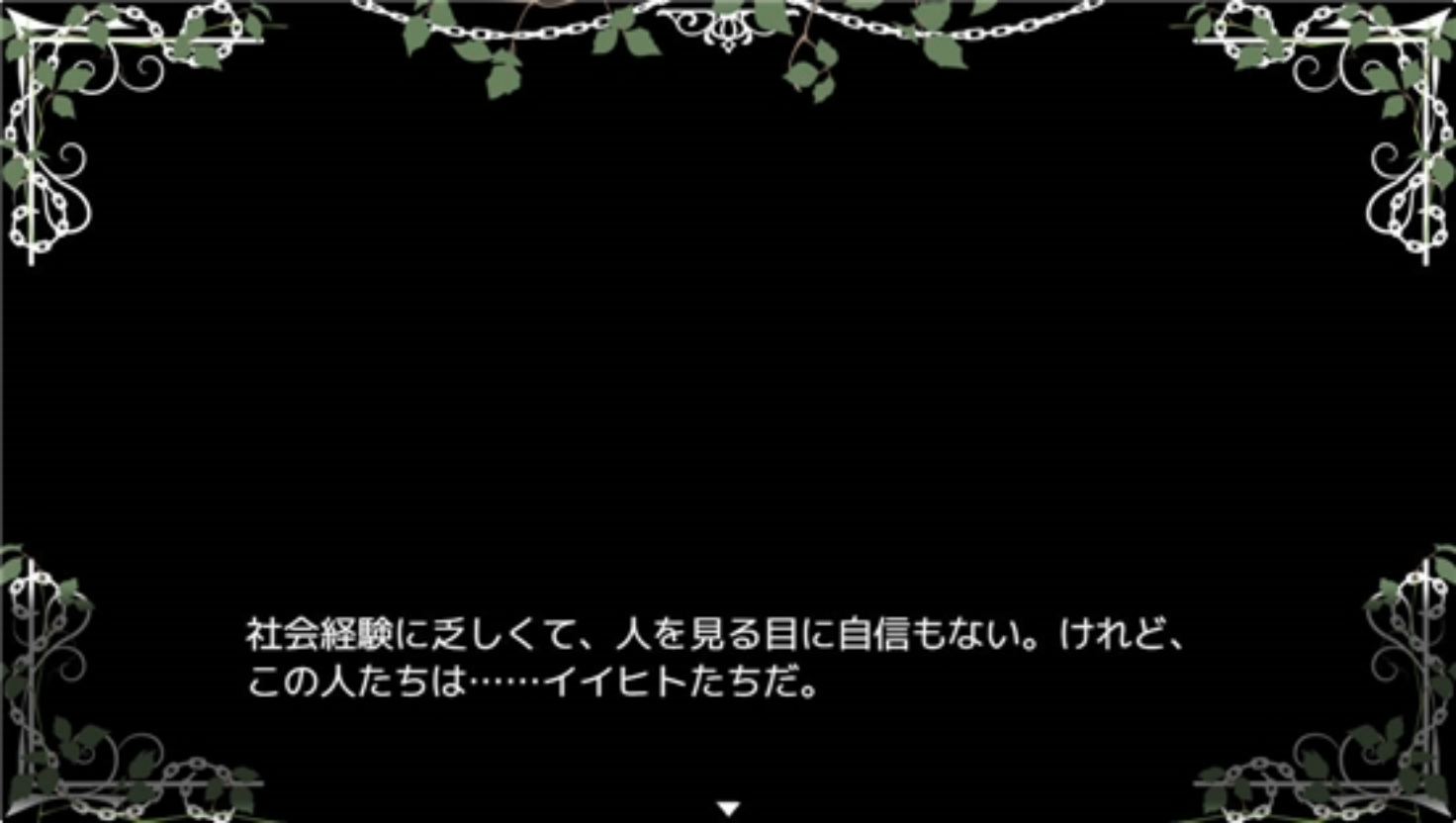
性依存で、とまでは自分からは言い出せなかった。




A decorative border of white and green vines with leaves and a chain-like pattern runs along the top and sides of the page.

けれど、もし聞かれたら。俺はすぐにでも、打ち明けられるかもしれない。





社会経験に乏しくて、人を見る目に自信もない。けれど、
この人たちは……イイヒトたちだ。





[鵜野トオル]
「そっか」





[宮澄マシロ]

「……」





涙が、ぽろぽろと溢れているのがわかる。





[宮澄マシロ]

(みっともない。泣き止まなきゃ)





顔を見せられず、俯き続けていると……優しい、優しい声が降ってきた。





【黄橡サンゴ】

「な、マシロ。逆に話して気ィ済むんだったら、オレらと
呑んで気分変えてから帰んね？」





[宮澄マシロ]

「え、？」





[黄橡サンゴ]

「アオイさん、いーよな」





[東雲アオイ]

「ええ。構わないですよ」





声を投げたサンゴに、アオイさんが顔を覗かせて応える。





ほかほかと湯気がくゆるホットグラスを俺の前に置いたあと、にこりと微笑んで続けた。





【東雲アオイ】

「今日はもう閉店にしておりますし、貸し切りでどうぞ」





[埴田モモ]

「お！」



[黄橡サンゴ]

「いーね、終電までにはまだ時間あるぜ」





【東雲アオイ】

「マシロくんは、いかがですか？」





[宮澄マシロ]
「で……でも」



【鵜野トオル】

「怖くはないけど嫌、かな」





【宮澄マシロ】

「そ、そうじゃなくて！ だってここ、紹介制って……」






[埴田モモ]

「あ〜……そこなあ」



A man with short, light-colored hair and glasses stands in the foreground, wearing a white shirt, a black tie, and a red plaid vest. He has his hands on his hips and a slight smile. The background is a bar area with a blue and white checkered floor, a brick wall, and a counter with various items. There are several small, colorful figures scattered on the floor and on the counter. The scene is framed by a decorative white vine border.

不安げに零した俺に、モモもまた困ったように頬を引っ掻く。



【東雲アオイ】

「いいえ、もしマシロくんが良ければ……『僕が』紹介しますよ」





[宮澄マシロ]

「え!？」





【東雲アオイ】

「お詫びの気持ちも勿論ですが、マシロくんは悪い人ではなさそうです」





[宮澄マシロ]

「え、でも！」





【東雲アオイ】

「ふふ、それに……きっと、これも何かの縁だと思うんですよ」






[宮澄マシロ]

「縁……」



[東雲アオイ]
「ええ」





柔らかな笑みを湛えたアオイさんが、先を続けた。



【東雲アオイ】

「僕は、縁という言葉が好きです。だから、こんなお店を
経営してる」





【東雲アオイ】

「日頃は隠している人も、そうでない人も。特殊を抱えている人たちの縁が、この店にはあります」





[宮澄マシロ]

「……」





【東雲アオイ】

「それを楽しんでいる人もいれば、悩んでいる人もいる。
……さっき泣いていた、マシロくんのよう」





[宮澄マシロ]

「……あ」






【東雲アオイ】

「マシロくんにとって、今日のことが良縁かどうかわかりません。けれど」



A man with light green hair and glasses, wearing a white shirt, a black tie, and a red plaid vest, stands in a bar. He has his hands on his hips and a slight smile. The bar has a blue and white checkered floor, a wooden counter with stools, and a brick wall background with various items like bottles and a clock. The scene is framed by a decorative white vine border.


言葉を切ったアオイさんが、ふわりと笑ってから唇を揺す
った。




【東雲アオイ】

「時にはこんな風に縁を繋ぐのも、いいんじゃないかって。
僕は、そう思うんです」





ロマンチックすぎでしょうか、とアオイさんが恥ずかしそうに続ける。



その言葉のあと、モモやトオル、サンゴの明朗な声がわいわいと鼓膜に届いた。



[埴田モモ]

「良いじゃねえか。倒れたっつーからには、マシロも人に
言えない悩みが溜まってんだろ」





[宮澄マシロ]

「！」





【鵜野トオル】

「ん、無理にとは言わないけど。それにキミは腰を打って
たし、すぐ帰すのは心配かな」





[宮澄マシロ]

「あ……忘れてた」





[黄橡サンゴ]

「忘れるぐらいなら、まー平気か」





ケラケラと声を上げたサンゴが、にっかた俺に向けて笑顔
を向ける。





[黄橡サンゴ]

「せっかくだから吞んでけよ。オレらが奢るから、な！」





[宮澄マシロ]

「サング……トオル……モモ」





[塙田モモ]

「な、マシロ？」





【宮澄マシロ】

(そういえば、下の名前を呼ぶのも呼ばれるのも……久しぶりだ)





初対面の人たちの、親し気な言葉と気安い空気。



それは馴れ馴れしいようで、無遠慮とは少しだけ違っていた。





[宮澄マシロ]

(程良くて、心地好い……って言えばいいのかな)





彼らもまたこの客なら、俺と同じように異質を抱えているのだろう。





だからこそ、いい距離感なのかも知れない。だったら。





【宮澄マシロ】

「……いい……のかな」





[塙田モモ]

「！」





[鵜野トオル]

「ん？」





[黄橡サンゴ]

「おお？」





俺は漸くの笑みを綻ばせ、ゆっくりと唇を開いた。



【宮澄マシロ】

「一緒にもう少し話しても……いい、かな」





[塙田モモ]

「お！！」





[黄橡サンゴ]

「もちろん！ 来いよ、マシロ」





[鵜野トオル]
「ん。おいで」





[東雲アオイ]

「ええ。どうぞゆっくり」





[塙田モモ]

「よっしゃ、っと！」





[宮澄マシロ]

「わ！！」





モモがぐいと俺を引っ張って席を寄せる。
サンゴが俺の持つグラスに杯を合わせ、トオルがくすくすと笑っていた。





何を飲むんだ、甘くて弱い酒がいいんじゃないか。
そんな彼らの声を聴きながら……俺は、縁という言葉を繰り返してみる。





【宮澄マシロ】

(これかどんな縁なのか、俺にはわからない。
けど……だけど)







[宮澄マシロ]


(今は、俺……こういうのもいいなって、思ってる)





初めての店と、初めての出会い。





淀んでいた胸の内に、ふわふわと暖かな気持ちで満ちていった。





フェアリアに集う
羊たちの唄

鶴野トオル (32歳)

職業：
フリーライター。

性癖：
ピゴフィリア
(腎部性愛)。

埴田モモ (26歳)

職業：ドラッグ売人。
性癖：ハノフィリア(病症性愛)。

黄椽サンゴ (23歳)

職業：
ビデオショップ店長。
性癖：
ハイグロフィリア
(分泌液性愛)。

気になる人は誰ですか？

《攻略キャラ》

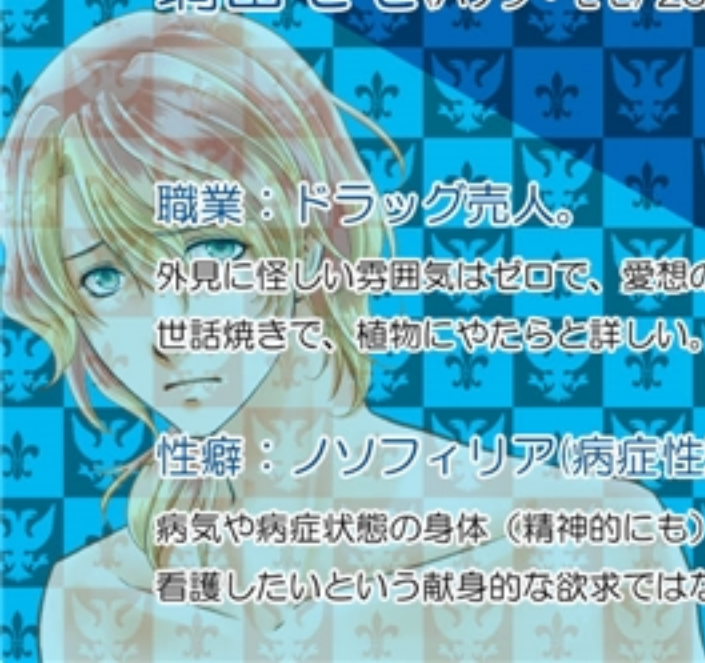
埴田モモ (ハナダ・モモ) 26歳

職業：ドラッグ売人。

外見に怪しい雰囲気はゼロで、愛想のいいお兄さんタイプ。
世話焼きで、植物にやたらと詳しい。

性癖：ノソフィリア(病症性愛)。

病気や病症状態の身体（精神的にも）が性的興奮の対象となり、
看護したいという献身的な欲求ではなく罹患者、罹患状態そのものに興奮する。



黄椽サンゴ (キツルバミ・サンゴ) 23歳

職業：ビデオレンタルショップの店長。

やたらと細かくスプラッタ、感動もの、AVを分類しているため、マニアがよく訪れる。表情がくるくる変わり、逆に掴み所がない。怒るとヤンキーのように怖く、笑うと子供のように無邪気に見える。

性癖：ハイグロフィリア(分泌液性愛)。

汗、経血、唾液、精液、涙等、分泌液そのものに対して興奮する。

《攻略キャラ》

鴉野トオル(ヒツノ・トオル) 32歳

職業：フリーライター。

落ち着いた物腰で、飄々として掴みどころがない。
好き嫌いの感情が薄く、自分のことを語ることもない。
尻にしか興味がないため、他人と肉体関係を持つのは面倒だと思っている。

性癖：ピゴフィリア(臀部性愛)。

所謂『尻好き』よりも臀部への傾倒が激しく、性的嗜好の対象が『臀部のみ』にある。

鶴野トオル (32歳)

職業：
フリーライター。

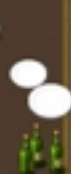
性癖：
ピゴフィリア
(臀部性愛)。

埴田モモ (26歳)

職業：ドラッグ売人。
性癖：ハノフィリア(病症性愛)。

黄椽サンゴ (23歳)

職業：
ビデオショップ店長。
性癖：
ハイグロフィリア
(分泌液性愛)。



《サブキャラ》

東雲アオイ (シノメ・アオイ) 36歳

職業：『フィリア』の経営者

見た目は年齢よりもすこぶる若く、よく従業員に間違われる。

柔和で穏やか。いつもにこにこしていて、誰に対しても敬語。

歌声に昂奮するため、店のBGMには自身で選んだ歌なしCDを流している。

性癖：アコースティックフィリア(音響性愛)。

音楽や歌、声や吐息など、音によって昂奮し、欲情する。



鶴野トオル (32歳)

職業：
フリーライター。

性癖：
ピゴフィリア
(臀部性愛)。

埴田モモ (26歳)

職業：ドラッグ売人。
性癖：ハノフィリア(病症性愛)。

黄椽サンゴ (23歳)

職業：
ビデオショップ店長。
性癖：
ハイグロフィリア
(分泌液性愛)。

僕はサブキャラです。

《主人公：受》

宮澄マシロ (ミヤズミ・マシロ) 21歳

職業：フリーター。

自己の快樂以外に関心が持てず、他人と親しい関係が築けない。
けれど他人と話すのは好きで、人懐こい。
内心では、ずっと親しい友達が欲しいと思っている。

オナニー依存(性依存)。

自慰に対して強迫的(やらずにいられない)、衝動的(思い付いたらすぐシたくなる)、
貪欲的(執拗にシてしまう)、反復的(繰り返してしまう)。



鶴野トオル (32歳)

職業：
フリーライター。

性癖：
ピゴフィリア
(腎部性愛)。

埴田モモ (26歳)

職業：ドラッグ売人。
性癖：ハノフィリア(病症性愛)。

黄椽サンゴ (23歳)

職業：
ビデオショップ店長。
性癖：
ハイグロフィリア
(分泌液性愛)。

